

編集後記

『人間科学研究』第4巻第2号をお届けします。平成19年4月の人間科学部の開設と人間科学会の発足から4年目、お陰様で1期生が卒業し社会へと巣立つことができました。

今号は、巻頭の学術講演会記録に加え、こども学科7件、スポーツ学科3件の研究成果が寄せられました。

巻頭は、著名な講師と本学スポーツ学科教員のコラボレーションにより地域の未来を担うジュニア選手の育成をめざした企画で、体幹トレーニングの理論と実践が示されました。

井上氏は、地元旧制四高の学生サークル活動と西欧音楽受容との関係を文明開化された明治時代の社会背景やキリスト教、具体的な人物交流の視点から多角的に検討しました。

川村氏は、語の前に付いて派生語を作り元の語の意味を補ったり変えたりする形態素である接頭辞 sub の概念属性を漢語「被・下・潜・減・上・後・細」の七つに分類しました。

北川氏は、金沢市の子育て支援に関する実態調査を継続、夢ステーションの利用者は核家族で30歳代の母親が多いことを実証し、官民一体のサービスの在り方を提言しました。

高氏は、保健室登校の問題をAさんの事例を通じて検証、家庭や学級ではストレスを覚え居心地が悪いといった心理が甘えや逃げと単純には決めつけられない状況を訴えました。

谷中氏は、日本コンピュータ音楽教育学会の設立から今日までの軌跡を辿り、今後の課題と展望を示しました。アナログからデジタルへの移行は音楽の世界にまで及んでいます。

直江氏は、イタリア人声楽家アドルフォ・サルコリの足跡を辿り、彼の出自・家族・職業等、祖国での貴重な記録を発見し、謎のベールに包まれていた人物像を明らかにしました。

村井氏は、全国的にも賛否両論が起きた「小中学生に携帯電話を持たせない石川県条例」について、当事者である児童生徒の意識調査から情報端末利用の適正年齢を求めようとなりました。

池田氏は、少子化や過疎化といった社会的問題の解決を図る際、学都金沢の学生が衆知を結集し、里山自然体験などの実践を通じて学生と地域が連携できる仕組みを示しました。

島田氏らの共同研究は、野球のグラブさばきについて医療用マルチヘリカルCTスキャンを使って捕球前後の手指肢位を画像解析し、精密で柔軟な関節の機能を数値で示しました。

杉林氏らの共同研究は、男子中学生の平衡感覚と体力・運動能力（走・跳・投）と重心動揺との相関についてマットスキャンを使って種目別に解析し、結果を数値で示しました。

以上、学校教育や地域社会で貢献しようとするスタッフが各々の専門ジャンルで最新の統計資料やハイテク機器を駆使して意欲的に取り組んだ成果です。様々な場面でアンケート調査や測定実験に快くご協力くださいました各位に対し、心より感謝いたします。

どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2011年3月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学会に帰属します》